



Profile

福村渡船

原田一十四(かずとし)さんは、祖父や父が漁師をしていたため、いつも海で遊んでいた。渡船をしていた人が高齢化で廃業すると聞き、47歳で地元企業を退職して手を上げた。1年の半分は渡船業、残りの半分は、素潜り漁やタコ漁を行う。淡島海岸にある亀崎漁港から原田さんが渡してくれる4つの島周辺は福村磯と言われ、かつては、福村磯専門のガイド本も作られた西日本有数のチヌ釣りのメッカとなっている。



チヌ釣りのメッカを守り 子どもたちに海の楽しさを教える

「僕がやめたら、する人が誰もおらんようになる。身体が続く限りやりたいと思っています」と渡船業への思いを語る原田一十四さん。福村磯でチヌを釣ることは『チヌ釣り大学』と言われるほど、釣り人にとって憧れだった。そんな福村磯の釣りを絶やしてはならないという強い思いで日々仕事に精を出している。

最近の海を取り巻く環境はけっして良いとはいえない。福村磯のひとつ、青島周辺には、風に乗る那賀川からペットボトルなど多くのゴミが流れつく。そこで、原田さんは『青島を守る会』を立ち上げ、地元の高校と連携して年に数回、島の清掃活動を行っている。

また、2021年にグランフィットネス観光協会が主催した小学生わくわく企画『SUP&無人島体験ツアー』では、初めての乗る船や箱メガネで見る海の魚に子どもたちから歓声が上がった。今後も子どもたちが磯に渡って海と触れ合い、魚を身近に見ることができる取り組みをずっと続けていきたいと考えている。

小さい時からみてきた美しい淡島の海。祖母の営む旅館にも、釣り人や海水浴客など多くの宿泊客で賑わっていた。「また、そんな賑わいを取り戻したいよね」そういう原田さんの顔はとても優しかった。